第三十四小洞天「天目山洞（大滌玄蓋洞天）」と洞霄宮の現況

酒井規史

1. はじめに

2012年3月21日、筆者は浙江省臨安市にある第三十四小洞天の「天目山洞（大滌玄蓋洞天）」と、その付近に建てられていた道観である洞霄宮の遺跡を訪れる機会があった。本稿はその現況について、簡単な報告を行うものである。以下、各種資料によって「天目山洞（大滌玄蓋洞天）」と洞霄宮の沿革を概観し、その上で遺跡の現況について述べることにしたい。

2.「天目山洞（大滌玄蓋洞天）」の変遷

今回訪れた「天目山洞（大滌玄蓋洞天）」は、唐代の司馬承禎が第三十四小洞天としている洞天である。この洞天の付近には、同じく司馬承禎が第五十七福地としている天柱山も存在しており、ともに杭州の西側に位置している。ただし、以下に見るように、唐末・五代までの資料においては、このふたつの聖地に関する記述は一定しない。筆者が「天目山洞（大滌玄蓋洞天）」という特殊な表記をするのも、洞天の位置が時代によって変化するためである。

そこで、以下の記述が理解しやすいように、付近の地勢について最初に述べておこう。[*1] このふたつの聖地からさらに西に行ったところには浙江省の名山のひとつである天目山がそびえている。洞天の存在する大滌山と福地である天柱山は、ともに天目山から東にのびた支脈に属している。その支脈は枝分かれしており、大滌山は北側にのびる支脈、天柱山は南側にのびる支脈の一部である。そして、杭州周辺で最大の道観のひとつである洞霄宮（およびその前身である天柱観）がその二つの聖地に囲まれるようにして建てられていた。

注1…洞天福地の地理については、王純五訳注『洞天福地嶽瀆名山記全訳』（貴州人民出版社、1999年）を参照した。

以上のことを念頭に、この第三十四小洞天と第五十七福地についての資料を見ていくことにしよう。司馬承禎の作である『洞天福地天地宮府図』（道蔵1026『雲笈七籤』巻二十七）には、三十六小洞天のうち、三十四番目に「天目山洞」があげられている。[*2] その記述を見ると、

> 第三十四天目山洞。周囲一百里、名曰天蓋滌玄天、在杭州餘杭縣、属姜真人治之。（8b）

とあり、杭州の余杭県に位置しているという。また、その別名の「天蓋滌玄天」

注2…本稿では、『道蔵』における文献の所在は、翁獨健編『道蔵子目引得』（哈佛燕京学社、1935年）の番号によってしめすことにする。

という名称も後世の「大滌玄蓋洞天」に類似しており、本稿で主題とする洞天に該当するようである。しかし、「天目山洞」という名称からわかるように、天目山に洞天があるように考えられていたらしい。

また、七十二福地の第五十七には天柱山が入っており、以下のように記されている。

第五十七天柱山。在杭州於潜縣、属地仙王伯元治之。(15b)

福地の位置は余杭県よりも西側の於潜県となっている。この福地を治めるという王伯元については不詳であるが、『真誥』(道蔵 1010)にみえる王玄甫と鄧伯元という二人の神仙の名前を組み合わせたもののようである。[*3]

唐末五代に活躍した杜光庭の『洞天福地嶽瀆名山記』(道蔵 599)では、この洞天と福地についての記述が変わっている。まず、天柱山が三十六洞天の三十一番目に数えられており、以下のように記述されている。

天柱山、大滌玄盖洞天、一百里、在杭州餘杭縣天柱觀。(8a)

ここでは、洞天の位置が天目山から天柱山に変わってしまっている。また、洞霄宮の前身である天柱観(詳しくは後述)に位置しているとされていることから、洞天は天目山ではなく、より東側の現在の位置に移動したことが確認できる。さらに、洞天の名称も司馬承禎の記述とはちがい、宋代以降に用いられる名称と同じになっている。

それでは、第五十七福地の天柱山はどうなってしまったのであろうか。そこで七十二福地の項目を見ると、六十四番目の福地に天柱観のことが記されていることに気づく。

白鹿山、杭州天柱観、呉天師所隠。(10b)

ここに見える「白鹿山」は大滌山の主峰である白鹿峰のことと思われるので、実質的には大滌山のことであろう。[*4] なお、文中の「呉天師」は唐代の著名な道士である呉筠のことをさしている。

以上のように、司馬承禎の『洞天福地天地宮府図』と杜光庭の『洞天福地嶽瀆名山記』では、洞天と福地の位置が入れかわってしまっている。[*5] しかし、大滌山と天柱山は同じ山系に属しているので、混同されても仕方がないところもある。また、洞天と福地の記述が一定しないのは、もともと(例えば茅山のように)確たる伝承がある聖地ではなかったからであろう。

注 3…『真誥』巻十四・7b～8a。

注 4…『洞霄図志』巻二「白鹿山。」『洞霄図志』については次節と注 11 を参照。

注 5…この二つの資料において洞天福地の記述に違いがあることについては、大形徹「洞天における山と洞穴―委羽山を例として―」(『洞天福地研究』第一号、2011 年)に付された図を参照。

大滌山と天柱山の一帯は天目山という豊かな水源をもち、自然環境にめぐまれている。そのため、付近の一帯が修行や隠居に適した場所として聖地とされていったと考えられる。そして、唐代に天柱観が著名な道観となり、洞天福地の位置も最終的には天柱観の近くにひきつけられて考えられるようになったようである。

上述のように大滌山に隠居したという呉筠は大歴十三年(778)に「天柱観碣」を記しており、その中で以下のように述べている。

> 因廣仙跡、為天柱之觀。有五洞相鄰、得其名者、謂之大滌。雖寥邃莫測。蓋與林屋・華陽密通太帝陰宮耳。

これによれば、天柱観は五つの洞と接しており、その中でもっとも著名なのが大滌洞であり、林屋洞や華陽洞とともに「太帝の陰宮」に通じているという。[*6] 上述のように司馬承禎は第三十四小洞天を「天目山洞」としていたが、司馬承禎が死去した開元二十三年（735）のあと、およそ四十年のうちに洞天が天柱観のそばに位置づけられるという変化が起きたと考えられる。

そして、北宋時代に天柱観が洞霄宮と改称し、宋代における主要な道観のひとつとなったことで、洞天の位置も付近の大滌山に固定した。[*7] それと同時に、「大滌（玄蓋）洞天」という呼び名も定着していったようである。なお、『洞霄図志』巻二の「大滌山」の項目には、この洞天の名称について「この山 洞を以て之を名づく。舊志に謂う、もって大いに塵心を洗滌すべしと。故に大滌と名づく」と記されているが、何に由来するのかは明らかではない。[*8]

そして、この大滌玄蓋洞天も洞霄宮と同じく、宋朝に公認された重要な聖地となっていく。それをしめすのが、北宋の仁宗の時代に朝廷が公式に行う投龍簡の儀式の場所として選ばれたことである。

天聖四年（1026）に、宋朝は道教祭祀を行う費用と負担の軽減のため、二十箇所の聖地を選び、ほかのところでは祭祀をとりやめることにした。[*9] これは、前代の皇帝である真宗が国家祭祀に巨額の費用を用いていたことに対する反動であると考えられる。『東斎記事』巻一には、その際に選ばれた聖地が列挙されており、宋代に重要視されていた聖地を知ることもできるので、以下に引用してみよう。

> 道家有金龍玉簡。學士院撰文、具一歳中齋醮數、投於名山洞府。天聖中、仁宗皇帝以其險遠窮僻、難齎送醮祭之具、頗爲州縣之擾。乃下道録院裁損、才留二十處、餘悉罷之。河南府平陽洞・台州赤城山玉京洞・江寧府華陽洞・舒州潛山司真洞・杭州大滌洞・鼎州桃源洞・常州張公洞・南康軍廬山詠真洞・建州武夷山昇真洞・潭州南岳朱陵洞・江州馬當山上水府・太平州中水

注6…『洞霄図志』巻六。なお、この「太帝の陰宮」は鄞都山のことをさしていると思われる。『真誥』では、鄞都山の主のことは「北太帝君」と称されている（巻十五・5a）。

注7…北宋・李思聡の『洞淵集』（道蔵1055）では、ふたたび天目山を第三十四小洞天としているが、（巻二・8a）これは司馬承禎の記述をもとにしたためであろう。以下に述べるように、北宋時代には第三十四小洞天は大滌山にある洞窟として固定していく。

注8…この「旧志」は、徽宗時代に唐子霞が撰した『大滌真境録』のことをさしていよう。『大滌真境録』は『洞霄図志』にさきがけて編纂された宮観志であるが、現在は失われてしまっている。『洞霄図志』巻六には成無玷による本書の後序が収められている。

注9…『続資治通鑑長編』巻一百四に「（天聖四年十二月）辛巳、道録院上所定名山洞府歳投龍簡者二十處、餘悉罷之。」とあり、投龍簡をする場所を道録院が定めたことが記されている。また、『清波雑誌』巻九にも、以下に引用する『東斎記事』巻一と同じような記述がある。

府・潤州金山下水府・杭州錢塘江水府・河陽濟瀆北海水府・鳳翔府聖湫仙遊潭・河中府百丈泓龍潭・杭州天目山龍潭・華州車箱潭。所罷處不可悉記。予嘗於學士院取金龍玉簡視之、金龍以銅制、玉簡以階石制。

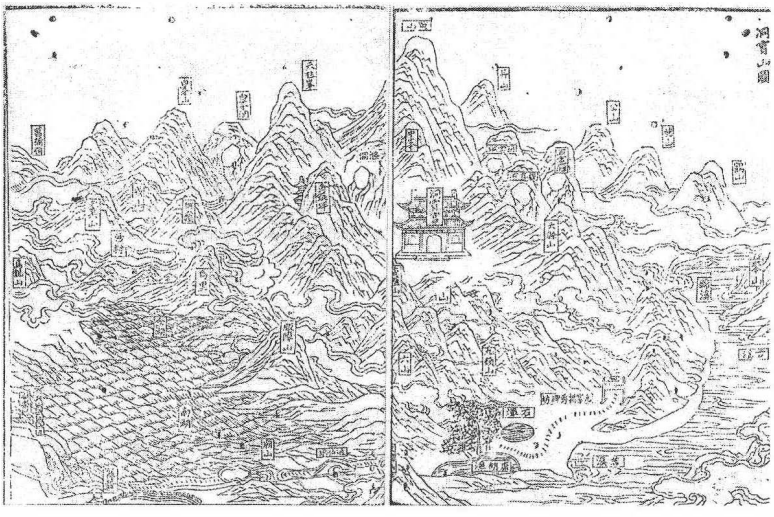
これを見ると、「杭州大滌洞」は五番目にあげられており、宋朝の重要な聖地として位置づけられていたことが知られる。また、「杭州天目山龍潭」も聖地にあげられていることから、唐代までとはちがって天目山は別の聖地として区別されていたこともわかる。

以上にみてきたように、北宋時代には大滌洞天は現在の位置に確定した。そして、洞霄宮と一体となり、杭州地域の聖地として重要な位置を占めるようになったのである。

3. 洞霄宮の沿革

続いて、今回訪れたもうひとつの遺跡である洞霄宮の沿革を述べる。上述のとおり、大滌山と天柱山というふたつの聖地の付近に建てられていたのが洞霄宮である。『洞霄宮志』所収の「洞霄宮図」をみると、洞天福地と山に囲まれた洞霄宮の周辺の地勢が、どのようにイメージされていたかがよくわかるであろう。(図 1) [*10]

洞霄宮に関する資料は、鄧牧と孟集虚によって元代の大徳年間に編纂された『洞霄図志』[*11]、および清代の聞人儒が乾隆年間に編纂した『洞霄宮志』[*12]という二つの宮観志に集められている。前者には唐代から元初までの関連資料が収集されており、洞霄宮を研究する上では必須の資料である。後者は、前者をもとにして、明代以降の記事を増補したものである。以下、主にこの両書に収められている資料にもとづきながら、簡単に洞霄宮の沿革を追うことにしたい。



注 10…『中国方志叢書(華中地方・第五五九号)』(成文出版社、1983 年)に収められている『洞霄図志』の明代鈔本は、多少の増補はあるとはいえ、元代の版本の形式を比較的忠実に残していると考えられる。その冒頭にもこの「洞霄宮図」と同じような、洞霄宮周辺の地勢をえがいた「洞天福地形勝之図」がある。ここで掲げた「洞霄宮図」よりも由来は古いと思われるが、残念ながら印刷がかすれており、判読できない箇所が多い。

注 11…『洞霄図志』のテキストに関しては、王宗昱「『洞霄図志』的版本」(連曉鳴主編『天台山暨浙江区域道教国際学術研討会論文集』所収。浙江古籍出版社、2004 年)を参照。本稿における引用は知不足斎叢書本を用い、必要があればほかのテキストで補正した。

注 12…『中国道観志叢刊続編』巻十七巻(広陵書社、2004 年)。序文の奥付は乾隆 18 年(1753)となっている。ただし、このテキストの末尾には乾隆辛卯(36 年= 1771)という年号がみえることから、最初の編纂後に増補がなされたものであることがわかる。

図 1 『洞霄宮志』所収の「洞霄宮図。」図の中心より少し右上にある建築物が洞霄宮。

大滌山や天柱山の付近にいつから道観のような宗教施設があったのかどうかは定かではないが、伝承においては漢の武帝が祭祀を行ったことが大滌洞天と洞霄宮の由来とされている。錢鏐が光化三年（900）に記した「天柱観記」（『洞霄図志』巻六）には、

> 自漢武帝酷好神仙、標顯靈跡、乃於洞口建立宮壇。歴代祈禱、悉在此處。

とあり、漢の武帝以来、歴代の祭祀の場所であったとされている。また、『洞霄図志』巻一「洞霄宮」の項目では記述がもう少し詳しくなっており、以下のように述べられている。

> 郡志云、漢武帝元封三年、始建宮壇於大滌洞前、投龍簡為祈福之所。經今一千五百餘年矣。

これによれば、元封三年（前108）に武帝が投龍簡の儀式を行ったとしている。しかし、この時代に投龍簡の儀礼は存在しておらず、また元封三年に武帝が杭州近辺に来たというのも、何にもとづいた伝承なのかは定かではない。[*13]

大滌山や天柱山の周辺が、いつごろから隠遁の地、もしくは神仙となるための修行の場となったのかも不明であるが、晋代には郭文が隠遁したとされる。『晋書』巻九十四の郭文の伝には、

> 郭文、字文舉、河内軹人也。少愛山水、尚嘉遯。年十三、每游山林彌旬忘反、父母終服、畢不娶、辭家游名山。歴華陰之崖、以觀石室之石函。洛陽陷乃步擔入呉興餘杭大滌山中。

とあり、郭文が大滌山に隠遁したことが記されている。[*14] おそらく、東晋時代以降には大滌山（と天柱山の一帯）は特別な場所としてとらえられるようになっていたのであろう。

その後、唐代の弘道元年（683）、潘先生（名前は不詳）の要請によって、洞霄宮の前身である天柱観が建てられた。それから徐々に聖地として認識されるようになったのか、著名な道士たちも天柱山を訪れたり、修行や宗教活動をするようになっていく。『洞霄図志』には、葉法善や司馬承禎、呉筠（上述の「天柱観碣」を記している）といった著名な道士をはじめ、朱法満（唐代における道教の主要な類書のひとつである『要修科儀戒律鈔』の編者）なども天柱山とゆかりのある道士として名があげられている。[*15]

唐末五代の頃、天柱観は呉越国の支配下に入り、呉越国の建国者である錢鏐が当時の高名な道士であった閭丘方遠を招き、保護を加えた。錢鏐みずからが

注13…『史記』封禅書や『漢書』巻六によれば、武帝は元封五年（前106）に「灊の天柱山」を訪れているが、これは安徽省に位置する別の天柱山である。小南一郎『中国の神話と物語り』（岩波書店、1984年）の第4章第5節を参照。

注14…『神仙伝』（『太平廣記』巻十四所収）の郭文の伝では、「余杭の天柱山」に隠遁したとされている。

注15…『洞霄図志』巻五「人物門」を参照。

記した「天柱観記」（上述）に、その当時のことが詳しく記されている。

つづく北宋の大中祥符五年（1012）、陳堯佐の上奏によって天柱観は「洞霄宮」と改称された。[*16] 宋代において、道観のランクのうち最上級の「宮」として認められ、洞霄宮は嵩山の崇福観とともに「天下宮観の首」と目されるほどであったという。[*17] なお、この「洞霄宮」という名称の由来については各種資料には明確に記されていないが、大滌洞天を付近に擁することから、「洞天」とほぼ同義ともいえる「洞霄」という語が選ばれたのではないかと思われる。

政和二年（1112）には、当時の住持である何士昭が洞霄宮の老朽化を朝廷にうったえ、経済的な支援として徽宗から度牒三百道を賜り、宮宇を一新したという 。しかし、その後、洞霄宮は方臘の乱で大きな被害を受けた。[*18]

南宋時代に入った紹興二十五年（1155）、当時の皇太后の命により昊天上帝を祀る昊天殿や鐘閣、経閣が建造され復興を遂げた。周知のとおり、北宋の滅亡とともに宋朝の都が臨安（現在の杭州）にうつったため、付近で最大規模の道観であった洞霄宮の地位はさらに高まることになった。乾道二年（1166）には、当時の太上皇帝（退位した高宗）が行幸するなど、皇室ともつながりをもっていた 。[*19]

なお、宋代には「祠禄の官」という制度があり、官僚たちに道観管理の名目で俸禄をあたえる仕組みが整備された。祠禄の官として「提舉洞霄宮」の肩書きを持った官僚は数多くおり、丞相までつとめた大物の政治家も含まれている。これは洞霄宮が、それらの政治家が祠禄の官になるのにふさわしい、格式をもった道観とされていたことをしめすものであろう。[*20]

宋代に隆盛を誇った洞霄宮であったが、南宋末の咸淳十年（1274）に火災が発生し全焼してしまったようである。その後、元代に入り、元貞元年（1295）には再び復興をとげた。この復興を主導したのは舒元一と郎如山という二人の道士であった。[*21] また、この洞霄宮の再建と前後して、洞霄宮の主だった道士たちは洞晨観、元清宮、沖天観などの新たな道観（支院）の創建を進めていった。[*22] そのことにより、南宋時代の末期から元代前半にかけて、洞霄宮出身の道士たちの勢力範囲は拡大していったようである。『洞霄図志』が編纂された大徳年間の頃は、洞霄宮の全盛期でもあった。

元末、洞霄宮は戦火にまきこまれ、荒廃してしまう。洪武二十三年（1390）、当時の提點である賈守元が復興を開始したが、その志をはたす前に死去してしまった。そこで副知宮事たちがその遺志をつぎ、永楽十三年（1415）に復興を果たした。[*23]

清代の乾隆十六年（1751）、洞霄宮はまたも火災で焼失してしまった。そこで、全真教の道士である貝本恒が復興に乗り出し、再建をなしとげた。[*24] しかし、その後の資料では洞霄宮のさびれた姿が描写されていることもあり、清代には洞霄宮は往時の勢力を失っていたようである。[*25]

注 16…『洞霄図志』巻四の「陳文惠公書字」という項目には、「宋祥符壬子、陳文惠公堯佐、典領漕職時表奏、興修宮宇、改宮額、奉旨書勑賜洞霄之宮六字」とある。

注 17…『洞霄図志』巻六・陸游「洞霄宮碑。」以下、南宋時代までの洞霄宮の沿革もこの碑文による。

注 18…『洞霄図志』巻一「三清殿」の項目には、「宋政和間、方臘之變、惟徽宗本命殿獨存」とあり、被害の大きさを物語っている。

注 19…『洞霄図志』巻四「通明館」の項目には、「宋高宗臨幸、寢食於此」とある。

注 20…祠禄の官の制度については、馮千山「宋代祠禄與宮觀（上）」（『宗教学研究』1995 年第 3 期）、同「宋代祠禄與宮觀（下）」（『宗教学研究』1995 年第 4 期）を参照。清代の朱彝尊による「杭州洞霄宮提舉題名記」には、提舉洞霄宮となった宋代の官僚が列挙されている。また、提舉洞霄宮となった政治家は林正秋『杭州道教志』（中国社会科学出版社、2011 年）にも整理されている。

注 21…『洞霄図志』巻六・家鉉翁「重建洞霄宮記」による。

注 22…『洞霄図志』巻一「宮観門」には、それらの支院が列挙されている。

注 23…『洞霄宮志』巻三・王達「重建洞霄宮記。」

清末にいたると、洞霄宮は杭州の玉皇山にある福星観の道士が管轄するようになる。清末の光緒年間には蔣永林が、中華民国に入ってからは李理山が洞霄宮を管轄した。[*26] これも杭州地域で第一の勢力を誇ってきた洞霄宮が、その地位を失っていたことを示すものであろう。

日中戦争当時は、洞霄宮の一帯も戦火にまきこまれてしまい、1938年には日本軍によって洞霄宮一帯に火が放たれたこともあったようである。また、周囲からも人々が戦乱を避けるためにやってきて、避難所のようになっていたという。なお、戦中から戦後にかけては、李理山の弟子である陳宗雲が洞霄宮の管轄をまかされ、洞霄宮の所有する土地や資産の管理などに尽力した。[*27]

以上のように、洞霄宮はいくたびかの興廃をへてきた。そして、以下に述べるように現在は宗教活動は行われず、ふたたび休眠期に入っている。中華人民共和国が成立したあとの洞霄宮の概況については、次節で述べることにしたい。

4. 大滌玄蓋洞天と洞霄宮の現況

4-1. 遺跡の所在地

現在、大滌玄蓋洞天と洞霄宮の遺跡は、浙江省臨安市の洞霄宮村にある。（図2）少し古い資料には、洞霄宮の遺跡は宮里村にあると記されていることが多いが、ごく最近、2007年に宮里村と石泉村が合併して洞霄宮村になったようである。[*28]

筆者が大滌玄蓋洞天と洞霄宮の遺跡を訪れたのは、2012年3月21日のことである。杭州市内でタクシーをチャーターし、臨安市方面へ向かう杭瑞高速道路に乗った。一時間弱走ったのち、青山湖インターチェンジで高速道路を下り、また一般道にもどって場所を探した。幸いにも高速道路の料金所の職員が大体の道を教えてくれたので、その通りに浙江省の省道102号線に沿って少し杭州方面にもどり、洞霄宮村へと続く道を南下した。旧宮里村の村落（現在でも村落の入り口に「宮里村」と彫られた石製のモニュメントが立っていた）を通り抜けると、畑の中に洞霄宮の遺跡があった。

なお、途中で数回、地元住民に道を聞いたが、誰もが遺跡の存在を知っており、地元での知名度は高いようである。また、付近の老人によれば、たまに調査に来る人がいるとのことであった。

4-2. 大滌玄蓋洞天

洞霄宮の遺跡から西側に少々行ったところに、大滌玄蓋洞天の入り口がある。（図3）洞霄宮の遺跡は平地にあるが、大滌玄蓋洞天の入り口は大滌山を少し登った場所にある。正確な距離はわからないが、『洞霄図志』巻三の「大滌洞」に「（筆者注：洞霄）宮の西北、半里に在り」とされているように、およそ数百メー

注24…『洞霄宮志』の序文を参照。貝本恒の事蹟は、清・梁同書の「洞霄宮貝法師伝」（『頻羅庵遺集』巻九所収）に詳しい。

注25…『洞霄宮志』巻三・陳夢説「両遊洞霄宮記。」

注26…『杭州玉皇山志』（『西湖文献集成』巻二十一冊所収、杭州出版社、2004年）の巻十五、巻十八を参照。

注27…許聖元『洞霄宮』（2003年）による。なお、この資料の入手については、廣瀬直記氏（早稲田大学大学院博士課程）にご協力いただいた。ここに記して謝意を表す。

注28…洞霄宮村のWEBサイト（http://xnc.zjnm.cn/zdxx/index.jsp?zdid=40811）を参照。

トルといったところではないだろうか。

洞穴の上には横向きに「大滌洞」という題刻がされていたが、これは新しいもののようである。（図 4）また、洞窟の入り口まで下りる階段が整備されていた。（図 5・図 6）

なお、清末から民国期にかけて撮影されたものと思われる大滌洞の写真が残されているが、それと現在の写真を見比べるとずいぶん印象がちがっている。（図 7・図 8）[*29] ただし、よく見ると（1）洞窟上部（現在、「大滌洞」の題刻があるところ）のアーチの角度、（2）その直下にある、向かって右側にある平たい板状の岩の形、（3）左側の直角に切り立った岩の形はよく似ており、現在の大滌洞の上部のみをアップで写したような印象も受ける。

また、1981 年に大滌洞を訪れた奚柳芳氏は、洞窟の天井から地面までの高さは 1 メートル 65 センチ程度であったとしている。[*30] つまり、次頁の古い写真に見えるように、大滌洞の入り口はそれほど高くなかったようである。その後、1990 年代後半から洞霄宮の遺跡を再開発する計画が始まり、21 世紀初頭（2002 年から 2003 年ごろ？）に洞霄宮の遺跡が整備されたという。大

注 29…図 7 は「老杭州網」という WEB サイト (http://www.hangzhoumemory.org/web/guest/hzdsyjt-content_display/-/asset_publisher/Z3jD/content/%E6%B4%9E%E9%9C%84%E5%AE%AB) に掲載されていたもの。写真の詳細は不明である。

注 30…奚柳芳「洞霄宮遺址考実」（『浙江師範学院学報（社会科学版）』1985 年 1 期）には、地元住民の話として、管理する者がいなかったので当時の大滌洞には土砂が堆積してしまっていたと記されている。付近一帯は土砂が堆積しやすい地層のようである。

図 2 「洞霄宮村」とスプレーされたゴミ箱

図 3　現在の大滌洞（全景）

図4 「大滌洞」の題刻

図5 洞窟の入り口に下りる階段

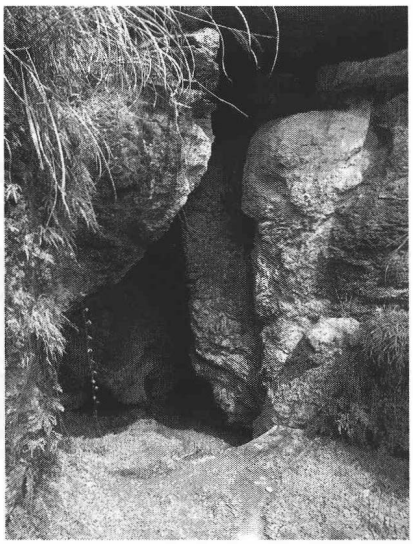


図6 洞窟の入り口

図7 清末から民国期（？）の大滌洞の写真

図8 現在の大滌洞の入り口上部。題刻の直下、向かって右側の岩の形状に注目

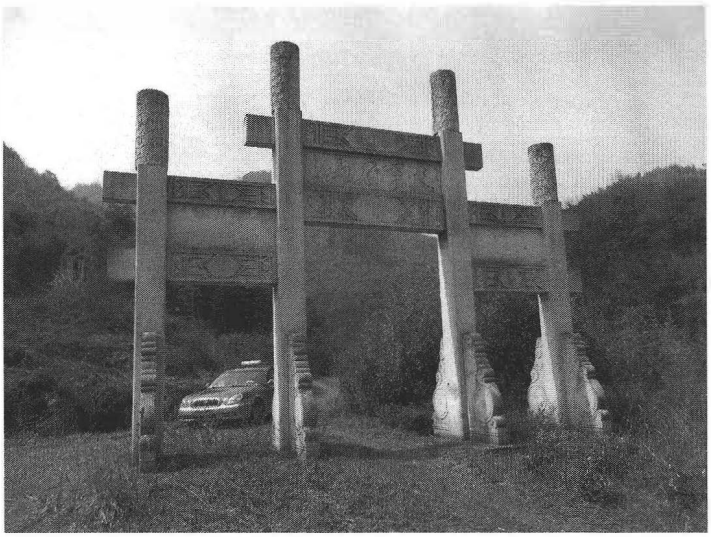


図9　大滌洞の近くに建てられていた牌楼

滌洞もその際に整備が行われたらしい。[*31] 洞窟の内部、および洞窟の周囲にたまっていた泥をかき出して、現在のような形に整備したのであろう。

なお、大滌洞から少し洞霄宮側に下ったところには牌楼が建てられていたが、これも上述の再開発のときに作られたものと思われる。（図9）

今回の調査では、大滌洞の中に入ることはしなかった。そこで、洞窟内部の様子が記されている資料をいくつか紹介することにしたい。

大滌玄蓋洞天にいつから人が入るようになったのかは不明であるが、南宋のころには洞窟の内部が整備されていたようである。『洞霄図志』巻三「大滌洞」には、洞窟の内部について以下のように記されている。

> 洞門石鼓、廣可尋丈。扣之逢逢有聲。自此上下皆平如剗削、兩旁崖石委曲、夾道中間、一石若柱倒懸、因以隔凡名之。過柱一穴如竇。内濶丈餘、中有圓井無底。惟聞浪浪水聲、乃歴代朝廷遣使投龍璧之處也。（中略）今洞中石潤如玉、竹蒼黑色、行路屈折、僅通人。至隔凡而止。每投龍簡、則命童子穿竇以入。云其中深杳不可測也。

これによれば、洞天の門には「石鼓」があり、叩くと音が響いた。また、洞窟の天井と地面は平らであり、道の奥には柱がさかさまになったような「隔凡」と称される石があったという。その石より奥には穴があり、その中にある井戸からは水の音が聞こえ、歴代朝廷が投龍簡の儀式を行う場所であった。

さらに、洞窟内部の様子については、石は光沢があって玉のようであり、岩肌は黒い色をしていて、道はまがりくねっており、人がやっと通れるほどだったとされている。そして、上記の「隔凡」と称される石のところで行き止まりになっており、投龍簡をするときは童子を穴にもぐりこませていたという。

注31…注27上掲の許氏の著作には、90年代以降の再開発について記されている。また、兪金生「240年前洞霄宮遺址分為餘杭、臨安両地」（『餘杭史志（電子版）』2010年第3期）にはその際に整備された箇所が列挙されており、その中には大滌洞もふくまれている。（http://www.yhsz.gov.cn/newsshowqk.aspx?classid=195&artid=297）

以上のように、『洞霄図志』では大滌洞についてかなり具体的な記述がなされており、およそ南宋の末期には実際に洞窟の中に入ることが行われていたようである。[*32] さらに少し時代が下るが、明代の黄汝亨と鄭圭、清代の陳夢説が洞窟の中に入った際の記録が残っているので、参考までに紹介したい。

注 32…『洞霄図志』の編纂は元代に入ってからであるが、南宋時代の資料も多く使われており、大滌洞の記述も南宋時代の終わりぐらいの状況を反映しているものと思われる。

まずは黄汝亨の残した「洞霄遊記」(『洞霄宮志』巻三所収)を見ると、以下のようにある。

> 是日方午、遂呼道士引至大滌洞。洞深窅、漢武投龍簡之所、持火炬、迺得入。行里許、有唐宋人留題、滅没不能辨。石色如蒼黒玉、中縦横、白文如界、又似飛雲片片。

この記述によれば、洞窟には一里ほど入ることができ、唐宋時代の文人たちの記した題記が彫られていたという。当時すでに文字はほとんど読める状態ではなかったようであるが、洞窟の奥に題記があったというのはそれ以前に洞天の内部を訪れるという行為が行われていたことを示唆している。[*33] ちなみに、洞窟の岩肌については『洞霄図志』と同じく黒地としているが、さらに白い文様があり、雲のようであったとも記している。おそらく、マーブル状の紋様があるような岩肌なのであろう。

注 33…引用文中の「唐宋人の留題」が唐宋時代のものか、後世に彫られたものかは定かではない。ちなみに、北宋の蘇軾『東坡志林』巻四「録温嶠問郭文語」では、蘇軾が大滌洞天を訪れた際のことが記されている。それによると、「洞は大にして、巨壑有り、深さは測るべからず)」とあるだけで特に洞窟内部のことを記していない。この記事からすると、北宋の頃にはまだ洞窟の内部が整備されていなかったとも考えられる。

おなじく明代の鄭圭も「遊大滌洞」(『洞霄宮志』巻三所収)で大滌洞を訪れた際のことについて、以下のように記している。

> 余乗一凳、覔大滌洞。道士遵諸友、従約一里許、至洞口。高可六七尺、廣称是、上作大滌洞天四字分書、不甚古、且甚小。傍一石空其足、持拳撃之如鳴鼓。燃大炬、逶迤数折、石作叟形、瓌瑋窆兀、涼氣四合、毛骨聳竪、窮其奥、得一所稍曠、可坐十人。中多伏翼、劃然長嘯、如崩岸裂石。傍一窟、深不可測。

ここには、洞窟の入り口の大きさや高さをはじめ、『洞霄図志』に記されている「石鼓」と思われる石のことが記述されている。また、黄汝亨と同じく、岩肌に文様があったと記している。さらに、洞窟にはカーブがあり、行き止まりは十人ほど座れる程度の大きさであったらしい。洞窟内にはコウモリが多いという記述もある。行き止まりの傍らに穴があるともしており、これも『洞霄図志』の記述と一致している。

また、清代の陳夢説は「両遊洞霄宮記」(『洞霄宮志』巻三所収)において、洞霄宮の道士である陳仁恩(貝本恒の弟子)とともに大滌洞に入った時のことを次のように記している。

大滌洞在西崖下、高五六尺、横一仞、洞口八分、書大滌洞天字。自外望之、不見底裡、道人（筆者注：この「道人」は陳仁恩のこと）篝火引入、毎数武輒一曲、石壁参差欹斜、皆作行雲流水之状。一石懸空、以掌撃之、鼕鼕有聲。道人曰、此石鼓也。再数折而至洞窮處。有石倒垂、名隔凡石。石後尚有隙、然不可入矣。壁上多遊人題詠、字漫滅不可讀。略観玩即出。

この陳夢説の記述は、これまで見てきた資料を合わせたようなものとなっている。これによると、大滌洞の内部はかなりカーブが多く、岩肌は「行雲流水の状」をしていた。また、中には天井からぶらさがっている石鼓があったという（この石鼓に関しては、これまでの資料では洞窟の入り口付近とされているのと少しことなっている。）さらに、洞窟の行き止まりの壁面には文人の題詠が残されていたが、黄汝亨と同じく字は摩滅して読めなかったとする。最後に、洞窟の行き詰まりには「隔凡石」があり、その後ろには隙間があったが入れなかったという。

以上のように、明清時代の資料によれば、洞窟の内部の様子はおおよそ『洞霄図志』に記されている通りであったようである。現在、残念ながら大滌洞の整備は完成していないようであり、実際に自分の目で洞内の様子を確認することは難しいのが現状である。今後、整備が進み、我々が洞窟に入れる日が来るのを待ちたい。

4-3. 洞霄宮の遺跡

上述のとおり、洞霄宮は杭州地域最大の道観のひとつとして、宋元時代にはかなりの規模を誇っていたようである。往時の姿をしのばせる「洞霄宮図」が清代の『洞霄宮志』に載せられているので、参考までに掲載しておく。(図 10)『洞霄図志』に見える、洞霄宮の施設に関する記述と対照すると、これは南宋時代の洞霄宮を図示したものと考えられる。『洞霄図志』の明代の鈔本にも同様の

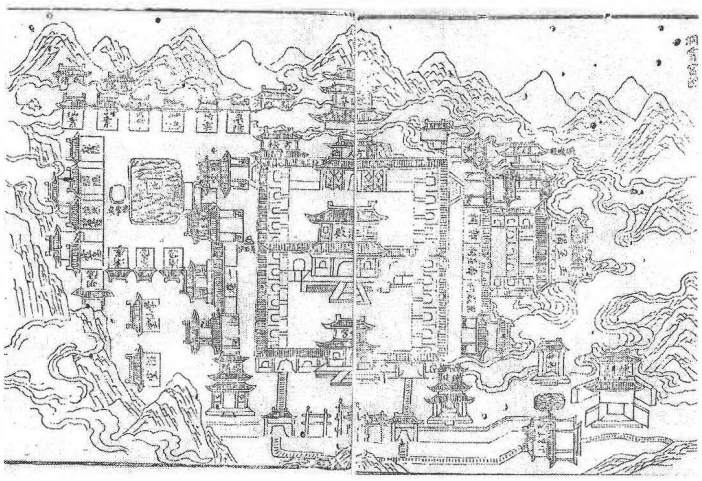


図 10『洞霄宮志』所収の「洞霄宮図」

図が載っていることから、この図自体はかなり古い来歴をもつようである。[*34] なお、この図からもわかるように、洞霄宮の遺跡は山に囲まれた盆地に位置している。筆者が撮影した写真を見ても、どの角度にも山が写りこんでいた（以下の図を参照。）

「洞霄宮図」を見ると、往時の洞霄宮が多くの建築物から構成されていたことがわかるが、現在の洞霄宮の遺跡には道観の建物は存在していない。まず目に付くのは二段から成る壇である。（図 11）下段の大きさは 10 メートル以上はあろうかというかなり大きなもので、四方それぞれには上の段に登るための階段（もしくはスロープ）と思われるものがあった。

この壇は、21 世紀初頭に洞霄宮の周辺を再開発した際に築かれたという「祭天壇」であると思われる。[*35] ただし、これが完全に新しく作られたものなのか、従来の洞霄宮の遺構にもとづいて建てられているのかは、現在のところ不明である。

注 34…『洞霄図志』の明代鈔本については、注 11 前掲の王氏の論文を参照。

注 35…注 31 前掲の兪氏の記事による。

図 11 遺跡にある壇の全景

上記の壇の南側はゆるやかな斜面となっており、およそ大きく三段に造成されているように見受けられた。また、石段の遺構も存在していた。ここはおそらく、洞霄宮の一部、もしくは洞霄宮に関連する建築物があった基壇であったと思われる。（図 12）

清末から民国時期のものと思われる洞霄宮の写真を見ると、その頃にはまだ建築物が残っていたようである。[*36]（図 13）しかし、この写真はどの角度から撮影したものか不明であり、現在残る建築物の基壇がどこに相当するものかはよく分からない。筆者の撮影した写真と比較すると、背後にうつる山並みの形から、この写真は東北側から撮影したものではないかと思われる。（図 14）この推測が正しければ、この古い写真の左側にうつっている建物の基壇が、現

注 36…画像は注 29 と同じく「老杭州網」という WEB サイトに掲載されていたもの。

図 12 壇の南側にある遺構。三段構造になっている

図 13 清末から民国期（?）の洞霄宮。東北側から撮影したものか

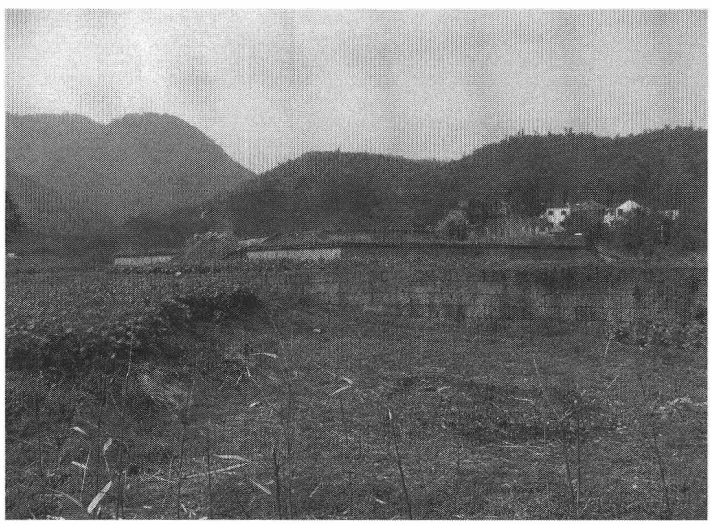


図 14 現在の洞霄宮のまわりの景観（東北側から撮影。）背後の山の形に注目

在、壇の南側にある基壇に相当するであろう。

さらに、壇の北側、少し離れたところには、昔の道観風の建築物が存在しているが、これも上述の再開発の際に建てられたものと考えられる。（図 15）ただし、これもなにか洞霄宮の遺構にもとづいて建てられたものなのか、まったく新しく作られたものなのかは不明である。

以上のように、筆者が見たかぎりでは、洞霄宮の跡地にはさしたる遺跡も文物も見当たらなかった。そこで、近年の状況を伝える記事をふたつ紹介し、洞霄宮が荒廃していった過程を見てみることにしたい。

許聖元氏によると、上述のように日中戦争中から陳宗雲という道士が洞霄宮の管轄をしており、1946 年にあるトラブルから一時期洞霄宮を離れたものの、復帰してからは高信一という道士に助けられながら洞霄宮の運営をしていたという。中華人民共和国成立後、民間の宗教結社（いわゆる「会道門」）を取り締まった際に陳宗雲は一年間拘束され、釈放された後は洞霄宮の近くの土地をあたえられ、そこで生活をしていた。洞霄宮には上下の大殿が残っていたがそれも取り壊されてしまい、残存していた大殿近くの平屋の建物も 1962 年に村の生産隊に売却されてしまったという。[*37]

注 37…注 27 前掲の許氏の著作による。

奚柳芳氏は人民共和国成立後の洞霄宮の状況について、二人の老人から証言を得ている。それによれば、解放初年、つまり 1949 年当時、また洞霄宮の殿宇は存在しており、盆地だけではなく、西側の小山にも建築物があった。その後の 1952 年、洞霄宮から道士が追い出されてしまった（奚氏はとくに名前を出していないが、この道士は上述の陳宗雲のことかもしれない。）そして、洞霄宮の建築物に使われていた木材のうち大型のものは臨安県の地方政府によって臨安の城内に運ばれ、ほかの建築に流用された。残った木材も、1958 年、当時の「大煉鋼鉄」政策の実施により洗いざらい持っていかれた。レンガなども周りの「生産隊」や農家に再利用されたという。上記の許氏による記述と考

図 15 洞霄宮の遺跡の北側にある建築物

え合わせると、洞霄宮が60年代前半までにはほぼ跡形もなくなっていたことは間違いなさそうである。

その後の70年代の状況は定かではないが、奚氏は1981年に当地の調査を行っている。それによると、遺跡の所在地は現地では「方場」と呼ばれており、盆地の東西両側に農家が存在していた。その西側の農家の方には階段の残骸と古い基壇があり、そこが昔の洞霄宮であった。その基壇の上には碑が何本かあり、ひとつだけ読み取ることができたという（この碑については後述する）。[*38]

この奚氏の証言からすると、80年代に至っても特に遺跡の整備は行われておらず、道士の活動も途絶えていたようである。そして、上述のように21世紀に入ってから洞霄宮（および周囲の遺跡）の再整備が行われたが、資金不足によって頓挫してしまったらしい。

ただし近年まで、この遺跡には文物もわずかながら残っていたようである。『中国文物地図集（浙江省巻）』の「洞霄宮遺跡」の項目には、「三賢祠」の遺構があり、その照壁には石碑五本が嵌め込まれていたと記されている。[*39] この「三賢祠」の位置について具体的な記述がないため、上述の遺構に相当するものかどうかは不明である。また、石碑のうち、具体的には「洞霄宮記」と「洞霄宮貝法師伝」があげられ、前者は断裂、後者はまだはっきり読むことができるとされている。[*40] なお、前出の奚氏も碑について言及しており、その文面からすると汪楽鶴の「遊洞霄宮」という詩（『洞霄宮志』巻五に所収）が石碑と記されていたようである。[*41]

これらの資料にある建築物と文物は、少なくとも筆者が遺跡の周辺をひととおり見て回ったかぎりでは確認できなかった。[*42] また、文物局による調査記録も現在のところ公刊はされていないようである。いずれ公表される日が来るのを待ちたい。

4-4. 元同橋

今回の調査で筆者が確認しえたかぎりでは、現存する洞霄宮に関する遺跡の中でもっとも保存状態がよいのは「元同橋」という石橋であり、洞霄宮の遺跡から少し歩いたところにある。（図16）ちなみに、明代の『大滌洞天記』（道蔵781）[*43] では「玄同橋」となっているので、清代の避諱によって「元同橋」とされて現在に至るようである。1988年に臨安県（現在の行政区域は臨安市）の県級文物保護単位に指定されており、文物局によって橋の付近に石板が建てられている。（図17）

この橋の名前は、呉越国時代に当地で活躍した閭丘方遠の号である「玄同先生」に由来するものである。『大滌洞天記』巻中には「玄同橋」という項目があり、この橋のことが以下のように記されている。

注38…注30前掲の奚氏論文を参照。

注39…国家文物局主編『中国文物地図集（浙江分冊）』（文物出版社、2009）を参照。なお、この「三賢祠」とは洞霄宮の提舉であった李鋼、および朱熹と黄道周を祭祀したものであろう。清・秦瀛の「洞霄宮三賢祠碑」（『小峴山人詩文集』文集巻五）に詳細が記されている。

注40…この二つの石碑は、陸游の「洞霄宮記」と、梁同書の「洞霄宮貝法師伝」であると思われる。『余杭市志』（中華書局、2000年）には、照壁に明清の碑刻があるとされ、その中で梁同書の楷書は読み取れるとある。この「梁同書の楷書」は、おそらく「洞霄宮貝法師伝」のことであろう。なお、唐之剣氏のブログ記事「臨安洞霄宮遺址生態文化旅遊資源的調査」によると、「貝法師伝」の石碑は臨安市の文物館で保管されているとのことである（http://blog.sina.com.cn/s/log_4b62586c01013hu1.html）。
もともとは『臨安科技』（1999年第1期）に掲載された記事のようであるが、雑誌の実物は未見。

注41…注30前掲の奚氏論文にその一節が記されていたので、それをもとに推測した。

注 42…注 27 前掲の許氏の著書には、撮影時期は不明ながら「三清殿の遺址」、「洞霄宮の旧壁」や「古道」の写真が掲載されており、今回見ることのできなかった遺跡がまだ残っている可能性がある。
また、小幡みちる氏（四川大学准教授）によると、付近の民家に唐代の井戸が存在しているとのことであった。注 29 上掲の「老杭州網」にも写真が掲載されている。さらに、以下のブログにもその唐代の井戸を実見したという記事が掲載されている。（http://blog.goo.ne.jp/tetsusaburoh/e/53a8882cab614c967f12ea9a8106a582）
なお、小幡氏には洞霄宮の遺跡について、筆者が訪問する前に情報をご提供いただいた。ここに記して謝意を表す。

注 43…『大滌洞天記』は、『洞霄図志』の節略本である。注 11 上掲の王氏論文を参照。

図 16　元同橋の全景

図 17　文物局の建てた石碑

昔、玄同先生與錢武肅王相度地理、鑿池架橋、故名。（9a ～ b）

注 44…元同橋のデータは注 39 上掲の『中国文物地図集（浙江分冊）』による。

これによれば、ここで玄同先生（閭丘方遠）と銭穆が（天柱観の建設のために）地勢を調査し、池を掘って橋をかけたのだという。天柱観は洞霄宮の前身であるから、洞霄宮の出発点となったモニュメントといえよう。

現在の元同橋は宋代に新しく架けられたものをもとにして、修復をしたものである。その長さは 6.55 メートル、幅は 2.7 メートルあり、少しアーチのついた形状をしており、現在もその下には小川が流れている。[*44] 写真でみて分かるように平たい石板を組み合わせて橋を形成している。（図 18）

図18　別角度から撮影した元同橋

また、欄干は五つのパーツからなっており、内側に複数の題記がある。題記のひとつめは「淳熙甲辰重九日、錦城盛十宣赦施銭造」というものである。（図19）『洞霄図志』巻三にも、宋の淳熙甲辰（11年＝1184）に、錦城の盛氏が寄付して玄同橋を重建したとあり、その記述を裏付ける。

もう一つの題記は元代に修復された際の「至正三年歳次」とだけあるもので

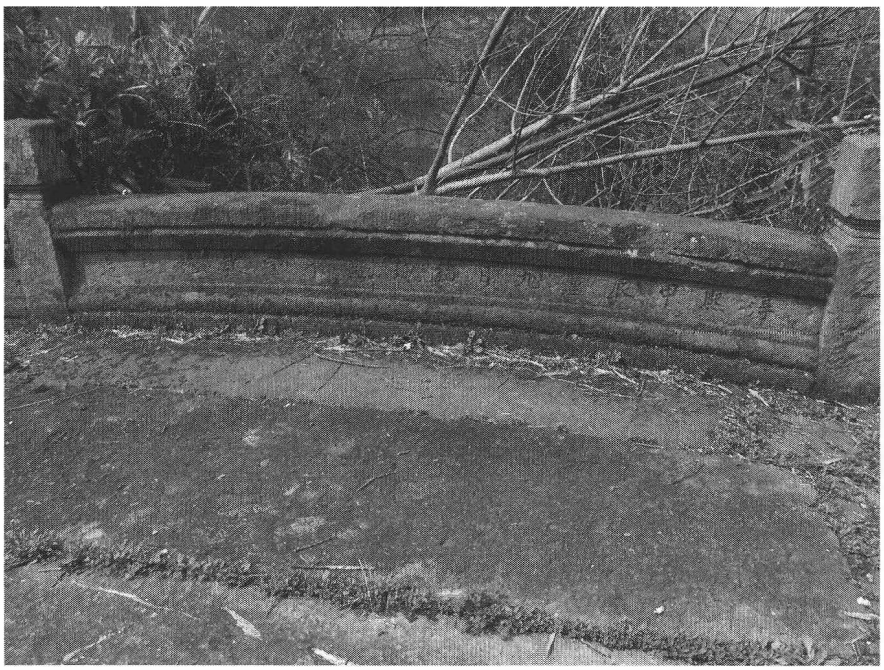


図19　南宋の淳熙十一年（1184）の題記

ある。（図 20）各種資料によると、清代の題記もあるとのことだったが、筆者は確認していない。筆者が訪れた当時、写真のように元同橋には現地住民が置いたと思われる芝がかぶさっており、それで隠されていたようである。[*45]

注 45…注 29 上掲の「老杭州網」によると、芝で隠されていた部分に題刻があるらしい。（http://www.hangzhoumemory.org/web/guest/hzgq-content_display/-/asset_publisher/z3pW/content/%E5%85%83%E5%90%8C%E6%A1%A5）

図 20　元の至正三年（1343）の題記。

4-5. 水道の遺構

元同橋から洞霄宮の遺跡に向かって坂道を南に上がっていくと、「天柱泉」と大書された石碑とそれを覆う碑亭、さらに道をはさんで水道の遺構がある。（図 21）おそらく、この近辺は洞霄宮の入り口にあたっていたものと思われる。この「天柱泉」の石碑と亭はごく新しいものであり、これも再開発の際に建てられたようである。（図 22）[*46]

水道の遺構はそれなりに古そうなものであったが、残念ながらその年代は不明である。地面よりも数メートル低いところにあり、階段で下りるようになっている。（図 23・図 24）今でも水が流れており、現在でも生活用水として使われているように見受けられた。ただし、その階段などは近年整備されたもののようである。この遺構については現段階で情報が欠けているので、機会をあらためて調査することにしたい。

注 46…『洞霄図志』巻第二には「丹泉」という泉について、「一に天柱泉と名づく」としており、「大滌洞の西百餘歩」で地上に湧き出ていたという。おそらくはこの泉の名前をとったものであろう。

図 21 「天柱泉」の碑亭と、水道の遺構の入り口。奥に上述の壇がみえる。
図 22 「天柱泉」の碑亭

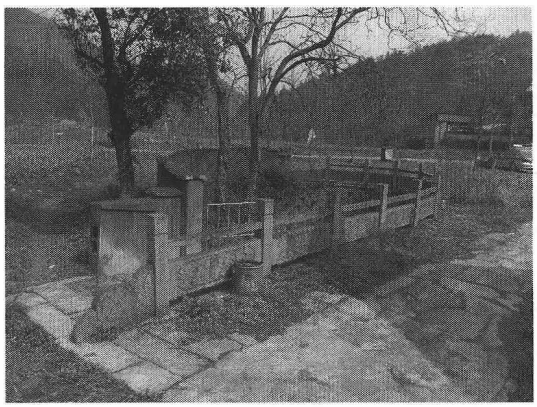


図 23 水道の遺構（上側）

図 24 水道の遺構

5. 結語

以上、大滌玄蓋洞天と洞霄宮の概要、両者の現況について述べた。また、各種の資料と現在の遺跡について照合できるところについては指摘しておいた。ただし、今回は洞霄宮の遺跡の周辺を詳しく調査することはできなかった。[*47] そのため、現況についてはごくごく簡単な報告にとどまってしまった。洞霄宮の遺跡を再訪する機会があれば、本稿の不足している点を補うことにしたい。

注 47…注 27 前掲の許氏著書と注 31 前掲の兪氏の記事によると、再開発の際には何か所か周辺の古跡も復元されたようである。遺跡を再訪する機会があれば、それらの場所も実見してみたい